

間的，人情的処世観⁵⁾である。現実に対して距離を置く遊戯的精神である。自己劇化の演出家である。アイロニーは，この演出家が活用するひとつの有力な演出手段である。だからこそ，そこには，ダイナミックな，生き生きとした自己劇化の舞台が展開する。財宝に目が眩んだ女が主人公になりうるのである。彼女は非難されているのではなくて，人間の弱さを心憎いほど心得た民衆が，自ら生み出した愛すべき主人公である。Wayne C. Boothが，「気に掛けるに値するアイロニーを読んでいるとき，実は人生そのものを読んでいるのである」⁶⁾と述べているが，けだし言いえて妙である。

5) ここで言う「人間的，人情的処世観」は，福原麟太郎が「ヒウマー」を説明して使った言葉を転用。Cf. 福原麟太郎『英文学の周辺』，法政大学出版局，昭和27年，p.95.

6) Wayne C. Booth, *A Rhetoric of Irony*, Chicago & London: The Univ. of Chicago Press, 1974, pp.43-44.

してうたうということは、正にこの「距離」がとられているのである。しかもなお、人間の行為が生き生きと伝わってくる。「人間の行為が開かれたダイナミックな二元性（‘open dynamic dualism’）を示すときにのみ、その行為は十全に人間的なものになる」²⁾とは、D. C. Mueckeがドイツのロマン派詩人 Friedrich Schlegel (1772-1829) のアイロニーに対する考え方を要約した言葉だが、ここで彼が言う「ダイナミックな二元性」は、正にバラッドが内包するものである。バラッドは民衆の「自己劇化」（‘self-dramatization’）と把らえられるが³⁾、それでは、このように展開するアイロニーを一種の「劇的アイロニー」（‘dramatic irony’）⁴⁾と言うこともできよう。民衆はうたの内容をよく知った上で、繰り返しそれをうたい楽しむのである。SIR PATRICK SPENCEで展開するアイロニーも、THE DAEMON LOVERで展開するアイロニーも、彼らは前もって諒解しているのである。バラッドの登場人物たちに襲いかかる人生のアイロニーを、当人たちは勿論事前に知らない。しかし、彼らのことをうたい聴く「聴衆」にはよく見える。

‘Parallelism’の場合もそうであるが、ここで言う‘Irony’も、勿論それは、修辞学でいうところの意識的な‘art’としてのレトリックではない。その意味では、バラッドはどこまでも‘artless’である。それにもかかわらず、結果としてこのようなレトリックが生み出されているということは、‘Parallelism’であれ‘Irony’であれ、それがいかに人間の基本的表現方法であるかということを示唆している。それは、人間の生きる営みの内に体得された知恵とも言えよう。人間が自然により密着して生きていた時代に、自然から学びとった知恵である。人間の心の移ろいやすさを自然界に投影して納得する—「無常観」とは、決して消極的な人生観ではなくて、現実を切り返して生きてゆく積極的な、人

2) D. C. Muecke, *Irony and the Ironic*, London & New York: Methuen, 1970, p. 24.

3) 本稿は、近い将来に予定しているバラッドについての入門書を念頭に置いて執筆しているものであるが、ここで言う「民衆の自己劇化」というテーマについては、これに先行する章として既に草稿の準備あり。

4) Cf. “*Dramatic irony* is a plot device according to which (a) the spectators know more than the protagonist; (b) the character reacts in a way contrary to that which is appropriate or wise; (c) characters or situations are compared or contrasted for ironic effects, such as parody; (d) there is a marked contrast between what the character understands about his acts and what the play demonstrates about them.” (*Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, p. 407.)

irony')である。人間の心が移ろいやすく、虚栄に充ちたものであることを、よく心得ているのである。

THE UNQUIET GRAVE (「眠れぬ墓」; 78A) という小品がある。あとに残された恋人が、死んだ恋人の墓にすわって嘆き悲しむ。「十二か月と一日の間、おまえの墓にすわって泣こう」と誓う (st. 2)。誓いの期間が過ぎてなおも泣き続ける男に向かって、墓の中から女は次のように言って諭す。

“T is down in yonder garden green,
Love, where we used to walk,
The finest flower that ere was seen
Is withered to a stalk.

‘The stalk is withered dry, my love,
So will our hearts decay;
.....’ (Sts. 6-7)

「あなたとわたしがよく歩いた
向うにみえる緑の園に
いちばんきれいに咲いて〔い〕た花も
いまは枯れて茎ばかり

「恋人よ その茎もからからに乾いている
そのように二人の心も枯れるでしょう
.....」 — (藪下 訳)

Child 26番として収められている二つの作品は、まったく相反する二つの事柄をうたっていて面白い。THE THREE RAVENS (「三羽のカラス」) では、緑の野で殺されて倒れている騎士を、彼の猟犬と鷹が守り続け、そこに雌鹿に変身した恋人がやって来て、傷口に接吻し、彼を背負って墓場まで連れてゆき、埋葬したのち、鹿もあとを追って死んでゆく、という風に愛の忠誠がうたわれる。ところが一方 THE TWA CORBIES (「二羽のからす」) では、その猟犬は勝手に狩りに出かけ、鷹も獲物をとりにその場を離れ、“His lady’s ta’en another mate,” (「愛人ははや ^{おんな} 別の情人に ^{おとこ} 首ったけ」) と、いかに愛が続かないかがうたわれる。

物事を一面的にしか見ないところにはアイロニーは展開しない。物が複眼的に見えるためには、対象に対して「距離」(‘detachment’) を置く余裕がなくてはならない。そこに「客観性」(‘objectivity’) が生まれる。バラッドは基本的には「主観性」(‘subjectivity’) が介在しない世界であるが、それは、このような距離が置かれているからである。悲劇的事件をことごとく様式化し、遊戯化

LORD THOMAS AND FAIR ANNET がそうであるように、愛の裏切りも最終的には必らず和解するという種類のうたばかりであったとしたら、果たしてバラッドは、このように長い間うたい継がれてきたであろうか。われわれがバラッドを魅力的に思え、信頼を置けるのは、決してバラッドが一面的な一途さ（‘single-mindedness’）をうたうのではなくて、人間に対する、人生に対する複眼的な捉え方がそこに在るからである。

今回の作品 THE DAEMON LOVOR の主人公は、題名からは海から戻って来た男であろうが、内容的に民衆にとっての本当の主人公は女性の方である。7 年以上にもわたって戻って来なかった恋人を待ちかねて、彼女は今では別の男と結婚している。（A 版では、その男は大工である。）子供も 2 人もうけている。そこに昔の恋人が戻って来たのである。「わたしが夫を捨てて／二人の子供も捨てたなら／一体どこへ連れて行ってくれるのです／あなたについて行くならば」（st. 6）—こう尋ねた彼女に彼は、8 隻もの船を浮かばせて帰ってきた、と海の向こうでの成功を告げる。本テキストの F 版では、夫と子供を捨てて船に乗り込んでのち、帆が琥珀織、マストが金箱におおわれていた、と語られるが（st. 9）、A 版では、これは前もって知らされる（st. 26）。そして続けて、次のようにうたわれる。

When he had told her these fair tales,
To love him she began.
Because he was in human shape,
Much like unto a man. (A; st. 27)

このような宝船の話を終えると
彼女は彼を愛しはじめました
なぜなら 彼は人間の姿
生きた人間そっくりだったからです

一度別れた恋人同志が再び結ばれるという愛の和解のパターンは、しかし、ここでは通じない。戻ってきた恋人は亡霊、しかも、割れた爪を持った悪魔の亡霊だったのである。男が連れて行く先は地獄。「男はトップマストを手でうちくだき／海の底へ沈めました」（st. 15）—迫力満点な悪魔の姿である。

言うまでもなくこの天罰（‘punishment’）は、恋人と夫に対して二重に愛の契りを裏切り、財宝に目が眩んだことに対してである。大宮人の愚かさと虚栄に向けられた民衆の皮肉な目が、ここでは、同じ仲間の女の虚栄心に対して容赦なく向けられている。それは、「自己暴露的アイロニー」（‘self-betraying

語注

Sts.

9 taffetie: 'A name applied at different times to different fabrics. In early times apparently a plain-wove glossy silk (of any colour); in more recent times, a light thin silk or union stuff of decided brightness or lustre. In the 16th c. mention is also made of 'linen taffety'. In recent times the name has been misapplied to various woollen material, etc.' (*OED*)

11 cloven foot: 'the divided hoof of ruminant quadrupeds, consisting of the third and fourth phalanges of the typical mammalian foot; ascribed in pagan mythology to the god Pan, and thence in Christian mythology to the Devil, and often used allusively as the indication of Satan, Satanic agency, or temptation.' (*OED*)

II' 鑑賞——アイロニーと無常観——

「スコットランドの大宮人がお嫌いなのは／コルクの靴がぬれること」—Sir Patrick Spence の一行の船が沈没する甲板の上を逃げまどう大宮人の姿を、そしてひょっとしたら文字通り、「コルクの靴がぬれること」をこの期に及んでもなお一番に気に掛ける彼らの姿を、民衆が痛烈な皮肉 ('irony') を込めてうたったことを先に紹介した。帰らぬものたちを待ちわびる奥方たちの、扇をかざし、金の櫛を髪にさした姿にも、民衆の皮肉な目が向けられていたと言えよう。

しかし、このアイロニーをもっと大きな視点から捉え直せば、そこで指摘した対照法によって浮かび上がるもののことごとくが、人生のアイロニーそのものである。喜びと悲しみ、嘆きと決断、人間の卑小さと自然の大きさ—Sir Patrick Spence の物語の全体が、簡潔に捉えられたアイロニカルな人生の縮図である。このうたの全体から伝わってくる印象が、決して息苦しい批判的精神ではなくて、むしろ悲劇的事件を煌びやかに包み込んでしまう独特の抒情性 ('lyricism') であるのは、こういう理由からである。

もしもバラッドが、ただ単に反権力的精神でうたわれるだけであったり¹⁾,

1) 1960年代の爆発的なフォークソングの勢いは、それが基本的に反戦歌という一枚岩であったために、80年代の今日、すでに昔日の面影は無い。Joan Baez をはじめとして彼らがバラッドをも取り込んでうたったことで、それをバラッドの変奏した今日的姿という言い方もできようが、ここに指摘する理由から、伝承バラッドの全体像からはやはり遠く隔たっていると思われる。

9. She set her foot upon the ship,
No mariners could she behold;
But the sails were o the taffetie,
And the masts o the beaten gold.
10. She had not sailed a league, a league,
A league but barely three,
When dismal grew his countenance,
And drumlie grew his ee.
11. They had not sailed a league, a league,
A league but barely three,
Until she espied his cloven foot,
And she wept right bitterlie.
12. "O hold your tongue of your weeping," says he,
"Of your weeping now let me be;
I will shew you how the lilies grow
On the banks of Italy."
13. "O what hills are yon, yon pleasant hills,
That the sun shines sweetly on?"
"O yon are the hills of heaven," he said,
"Where you will never win."
14. "O whaten a mountain is yon," she said,
"All so dreary wi frost and snow?"
"O yon is the mountain of hell," he cried,
"Where you and I will go."
15. He strack the tap-mast wi his hand,
The fore-mast wi his knee,
And he brake that gallant ship in twain,
And sank her in the sea.

- 3 . He turned him right and round about,
 And the tear blinded his ee:
 "I wad never hae trodden on Irish ground,
 If it had not been for thee.
- 4 . "I might have had a king's daughter,
 Far, far beyond the sea;
 I might have had a king's daughter,
 Had it not been for love o thee."
- 5 . "If ye might have had a king's daughter,
 Yer sel ye had to blame;
 Ye might have taken the king's daughter,
 For ye kend that I was nane.
- 6 . "If I was to leave my husband dear,
 And my two babes also,
 O what have you to take me to,
 If with you I should go?"
- 7 . "I hae seven ships upon the sea—
 The eighth brought me to land—
 With four-and-twenty bold mariners,
 And music on every hand."
- 8 . She has taken up her two little babes,
 Kissed them baith cheek and chin:
 "O fair ye weel, my ain two babes,
 For I'll never see you again."

ee, eye. *wad*, would. *hae*, have. *o*, of.
Yer sel, Yourself. *kend*, knew. *nane*, none. *baith*, both. *fair*, fare.
weel, well. *ain*, own.

と風化、そして、風化の中に結晶化してゆく様式化された表現形式を十二分に説明することにならないのではないか。バラッドが魅力的なのは、それがどんなに風化し、様式化されていても、人々の「現実」が独得の確かな手応えをもって伝わってくるからである。事件の詳細はことごとく風化してゆく。しかし、事件を受けとめた民衆の心情は、様式化される風化の中で、逆に純化して形で「事実」と深く結びついて伝わるのである。無名の船乗りの喜びと悲しみ、素早い決断、浸水する甲板の上での大宮人の愚かな姿、煌びやかな奥方たちの、それだけ一層哀れな姿—それらはすべて、民衆の心情がとらえた「事実」なのである¹²⁾。アネットの「半分は手縫いのわたしの下着」¹³⁾という確実な現実の上に構築された心情の世界である。今日われわれが風化した姿で受けとめるバラッドとは、このような意味での事実の風化とそれがもたらす結晶化した心情の世界、という謂である。その結晶化した心情に応えうる限り、バラッドは今後も、たとえどのように変奏した姿をとろうとも、「民衆」のものとして「伝承」されてゆくであろう。

I' テ キ ス ト

THE DAEMON LOVER (243F)

1. "O where have you been, my long, long love,
This long seven years and mair?"
"O I'm come to seek my former vows
Ye granted me before."

2. "O hold your tongue of your former vows,
For they will breed sad strife;
O hold your tongue of your former vows,
For I am become a wife."

mair, more.

12) Cf. 'For a Ballad, as for dreams, myths, village gossip and other works of the imagination, facts are merely raw material to be worked over and, if inconvenient, discarded. To look for historical truth in a so-called historical Ballad is unrewarding. Any truth one may find is truth to a prevailing feeling, not to the facts.' (Willa Muir, *Living with Ballads*, London: The Hogarth Press, 1965, p.87)

13) 'Lord Thomas and Fair Annet' (Child 73A, St. 15).

笑い／ふたこと読んだそのときに／涙が流れて眼がみえません」—これは、バラッドの常套表現、いわゆる ‘commonplace’ といわれるものの一種であるが⁸⁾、王からの手紙を受け取った喜び、次の瞬間、その内容が王の苛酷な絶対命令であることの悲しみ、手紙の一行目と二行目、「笑い」と「涙」の対照の内に、人生を包む喜びと悲しみの感情、人生の厳しい現実、を余すところなく簡潔に表現しきっている。冬の北の海への船出が危険なものであることを熟知している腕ききの船乗りの嘆き (st. 5) と、一転して威勢のよい船出の準備 (st. 6) も好対照である。バラッドの語りのテンポは、「嘆き」の感情を無視するのではない。最小限の表現の内に尽くして、そこに淀まないのである。逡巡しないのである。次の瞬間、決断と行動に移る。第7スタンザで部下の者が言う、「新月が旧月を腕に抱いている」というのも、このような自然界の姿を不吉なものとしてとらえる民衆の迷信を対照的に表現している⁹⁾。事件のクライマックスは、次の第8スタンザで対照法による最高の効果を生み出している。「スコットランドの大宮人がお嫌いなのは／コルクの靴がぬれること」—これは、嵐で沈没する船の甲板の上を逃げまどう、しかも、この期に及んでなおコルクの靴が気にかかる貴族たちに対する、民衆の痛烈な皮肉 (irony) である。「けれどもそのお遊びがすむまえに／お帽子がぷかぷか波に浮かびます」—人間（とりわけ、民衆にとっては雲上人の大宮人）の愚かさと仮借なき自然の大きさを、人々はたった四行の表現の内に、これほどまでに見事に対照的に浮かび上がらせうるのである。帰らぬ者たちを待ちわびる奥方たちの姿も、海底に眠る者たちの姿と対照的である。扇をかざし、金の櫛を髪にさして待つ彼女らは、やはり虚栄（富や身分や華やかさ）に充ちた愚かな人間の姿である。しかし、それが虚しければ虚しいほど、事件の悲劇性は倍增される。‘Sir Patrick Spence’ は、スコットランドの大宮人を足許に従えて眠る¹⁰⁾。悲劇の主人公はどこまでも彼なのである。

Childはこのうたに触れて、「今日のバラッドの読者と同様に、バラッドの歌い手や聴き手は、事実 (facts) というものに対しては無関心なのである。そのような事柄を詳細に調べなくてはならないと感じるのは編者たちだけである」¹¹⁾と述べて、このうたの歴史的背景が結局解明できないことに対して結着をつけているが、「無関心」(‘indifferent’) という言葉では、バラッドにおける「事実」

8) その詳細な用例については、*ESPB*, V, 474-75 参照。

9) このスタンザを冒頭に引用し、“I see the old Moon in her [the New-moon’s] lap, foretelling/The coming-on of rain and squally blast.” (ll. 13-14) とうたった S. T. Coleridge の *DEJECTION: AN ODE* は余りに有名である。

10) Child 18 版中、‘Sir Patrick Spence’ の方が大宮人たちの足許に眠ると表現されているのは、B. E. F. G. J. R. の 6 版。

11) *ESPB*, II, 19.

られないが、‘H’版ではノルウェー王の娘を連れ帰るため³⁾、‘I’版ではスコットランド王の娘をノルウェー王に嫁がせるべく連れてゆくため⁴⁾、‘J’版ではスコットランド王の娘(‘I’版の嫁いだ娘)を連れ帰るため⁵⁾、とそれぞれ異なった目的が語られる。

ダンファリンの町で血のように赤い酒を飲んでいたのは、どうやら Alexander III のようである⁶⁾。少なくとも Malcolm III でないことは確かだろう。しかし、仮りにその王が Alexander III だとして、王が船出を命じた腕ききの船乗り ‘Sir Patrick Spence’ なる人物は、歴史上どのような文献にもその実在を証明できないという。彼が当時どんなに一番の腕ききの船乗りだったとしても、所詮彼は一介の船乗り、「大宮人」ではないのである。彼の名が遠い昔の文献に見い出せなくても、当然かも知れない。

しかし、彼は主人公である。断片性が強い ‘A’ 版であろうと、歴史的背景をしのばせる他の版であろうと、彼がこのうたの主人公であることは変わらない。歴史的事実そのものは、長い年月を経た伝承の内に風化し、人々の記憶から廃れていっても、逆に、彼を主人公とする民衆の心情は、時を経るごとに純化し、結晶化(‘crystalize’)していった。歴史的事実が濃厚な場合に限らず、ほとんどどのうたの場合でも、遠くその源流をさかのぼれば、きっと、実際に起こった「事柄」を題材にバラッドはうたわれたのであろう。

‘Sir Patrick Spence’ なる腕ききの船乗りをめぐる民衆の心情は、いわゆる ‘parallelism’ (対照法) という見事に様式化された表現の内に結晶化している⁷⁾。第4スタンザの、「ひとこと読んでサー・パトリックは／大声あげて大

3) ‘The King’s daughter of Noroway, / ’T is thou maun bring her hame.’ (St. 4)

4) ‘To Noroway, wi our king’s daughter, / A chosen queen she’s now.’ (St. 9)

5) ‘...To Norraway, / To bring my dear dochter hame?’ (St. 1)

6) ノルウェー王 Eric の娘 Margaret, Maid of Norway を連れ帰る命令を出したということであれば Alexander III ではなくなる。それは彼の死後のことだからである。

7) バラッドの持つ様式化された表現は、民衆によってその修辭的効果が意識されて生まれたものではなく、あくまでも ‘artless’ な、人間の原初的な詩的表現の衝動である。それだけ、逆に、民衆が本来持っている詩的能力をバラッドの内に数多く見い出すことは、バラッド鑑賞の大きな喜びの一つである。Cf. ‘Parallelism seems to be the basic aesthetic principle of poetic utterance.... Tense emotion, such as joy, grief, anger, longing, seems naturally to give rise to parallel utterance, and, doubtless, parallelism was the basic element of primitive poetry before such refinements as meter and rhyme were invented.’ (Alex Preminger, ed., *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Princeton, New Jersey: Princeton U. P., 1974, p.599.)

(Canmore, 1057-1093)。上記の大聖堂と宮殿廃墟の敷地の一角に ‘Malcolm Canmore’s Tower’ と呼ばれる、今ではただ大きな石を積み上げただけの城趾がある。銅板の説明文に、‘There is no historical mention of the Tower of Dunfermline until about A. D. 1070, when Malcolm Canmore and his queen—Princess Margaret—celebrated their wedding...’ とあり、説明文の最後は、‘Historians are of opinion that the Tower was where “The King sits in Dumfering toon/Drinking the bluid-red wyne”.’ という文章で締めくくられている。言うまでもなく、バラッド SIR PATRICK SPENCE の出だしの部分である。このうたがそれほど良く知られていること、そして、遠い中世の王の座していた場所に辿り着いたこと—東洋からの来訪者に目眩めく感動を与えた銅板であった。

‘Sir Patrick Spence’ に非情な船出を命じた王は、しかし、Malcolm III ではなかったようである。時代は下って13世紀中葉、Alexander III (1249-1286) の治世に、スコットランドは ‘Golden Age’ と呼ばれる安定と繁栄の時代を迎えた。王の娘 Margaret は、1281年にノルウェー王 Eric の元に嫁ぐ。彼女は1283年、生まれたばかりの娘を残して死ぬ。1286年 Alexander III の死後、スコットランド女王として迎えられたのがこの孫娘 Margaret, Maid of Norway (1286-1290) であった。海難については、一つは、1281年に Eric の元に嫁ぐ Margaret に随行した一行の者たちが帰路遭難した事件、今一つは、1290年に世継ぎの Margaret, Maid of Norway をノルウェーから連れ帰ろうとした途次の遭難があった。

Percy によって初めて世に紹介されて以来、このバラッドには実に多くの異版があり、大方の編者たちは、このうたの歴史的背景をこの Alexander III をめぐる事柄として推測している²⁾。すなわち、チャイルド版で、‘A’ 版 (‘Percy’s version’; 本テキストに採用) では航海の目的も行く先も語られないが、‘G’ ~ ‘J’ 版では行く先はノルウェーである。その内、‘G’ 版では航海の目的は語

2) Sir Walter Scott, ed., *Minstrelsy of the Scottish Border*, ed. by Thomas Henderson, London: George G. Harrap & Co. Ltd., 1931, pp.97-98; ‘F. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, Vol. II, New York: Dover Publications, Inc., 1965, pp.18-20; Robert Graves, ed., *English and Scottish Ballads*, London: Heinemann, 1957, p.148; A. B. Friedmann, ed., *The Penguin Book of Folk Ballads of the English-Speaking World*, 1976, p.297, など。なかで Hodgart のみ、これを18世紀の創作とする。(Cf. M. Hodgart, ed., *The Faber Book of Ballads*, London: Faber & Faber, 1965. p.254.)

Jude, unto the feast of the purification of our Lady called Candel-mess." *Jam. III. Parlt. 2, ch. 15.*' (Thomas Percy, ed., *Reliques of Ancient English Poetry*, Vol. I, New York: Dover Publications, Inc., 1966, p.99.) ここにいう期間は、10月28日から2月2日の間。

- 11 **Aberdour**: See the note on **Dumferling** above. Cf. Child, *ESPB*, II, 19-20: 'The place where the ship went down was half owre to Aberdour, A, C, F?; ower by Aberdour, I, J, N; forty miles off Aberdeen, G, H, (H may only repeat G); nore-east, nore-west frae Aberdeen, D; between Leith and Aberdeen, K. B and E transfer the scene to St Johnston (Perth), and P to the Clyde, down below Dumbarton Castle. We may fairly say, somewhere off the coast of Aberdeenshire, for the southern Aberdour, in the Firth of Forth, cannot be meant.'

II 鑑賞—事実と風化—

スコットランドの首都エディンバラから北西へ約16マイル行ったところに 'royal burgh' (勅認自治都市)¹⁾ Dunfermline の町がある。他の小都市と何ら変わらない平凡なこの田舎の町で、しかし、一際大きく異彩を放つ建物が二つある。大聖堂と宮殿廃墟である。聖堂内には歴代スコットランドの王たちの墓があるが、説教壇の下に特別大きく設けられているのが Robert Bruce (1306-1329) の墓である。スコットランドの歴史はイングランドとの抗争の歴史と言ってよいほどだが、Mary, Queen of Scots (1542-1567. d. 1587) がその抗争の悲劇の女王としてスコットランド人に永遠に忘れられないのに対して、Bruce は、幾多の戦いに勝ち、1327年にはヨーク条約によって Edward III からスコットランドの独立を勝ち取った、彼らの永遠の英雄である。最終的には、1707年の議会の統一 (The Union of the Parliaments) によって、以後今日まで連合王国の中に組み込まれてきていることは周知の通りだが、実際にかの地に住んでみると、今日なお人々の胸の内には、かつて独立国であった誇りと今日の屈辱が縷々懷かれ続けていることを折々に感じさせられる。

四つの王国に分かれていた古代スコットランドが一つの統一王国になったのは Duncan I (1034-1040) の治世であった。ダンカン王が Macbeth (1040-1057) によって殺害されたのは、シェイクスピアの悲劇を通してわれわれが良く知るところである。マクベスを殺害して王位に就いたのが Malcolm III

1) 国王から直々に自治の勅許 (charter) をえたスコットランドの都市をこう呼ぶ。

8. O our Scots nobles were richt laith
 To weet their cork-heeled shoon;
But lang owre a' the play were played,
 Their hats they swam aboon.

9. O lang, lang may their ladies sit,
 Wi their fans into their hand,
Or eir they see Sir Patrick Spence
 Cum sailing to the land.

10. O lang, lang may the ladies stand,
 Wi their gold kems in their hair,
Waiting for their ain dear lords,
 For they'll see thame na mair.

11. Haf owre, haf owre to Aberdour,
 It's fifty fathom deep,
And thair lies guid Sir Patrick Spence,
 Wi the Scots lords at his feet.

laith, loath. *weet*, wet. *shoon*, shoes. *lang*, long. *owre*, before.
a', all. *aboon*, above. *into*, in. *Or eir*, Before (doubling of before).
kems, combs. *ain*, own. *thame*, them. *na mair*, no more. *Haf owre*,
halfway over. *thair*, there.

語注

Sts.

1 Dumferling: 'At Dunfermline, on the north side of the Firth of Forth, was a palace of the Scottish Kings. Aberdour is a little port, about five miles distant.' (William Allingham, ed., *The Ballad Book*, London: Macmillan & Co., Ltd., 1864, p.377.)

5 this time o' the year: 'In the infancy of navigation, such as used the northern seas were very liable to shipwreck in the wintry months: hence a law was enacted in the reign of James III. (a law which was frequently repeated afterwards), "That there be na schip frauched out of the realm with any staple gudes, fra the feast of Simons day and

- 2 . Up and spak an eldern knicht,
 Sat at the king's richt knee:
 "Sir Patrick Spence is the best sailor
 That sails upon the sea."

- 3 . The king has written a braid letter,
 And signed it wi his hand,
 And sent it to Sir Patrick Spence,
 Was walking on the sand.

- 4 . The first line that Sir Patrick read,
 A loud lauch lauched he;
 The next line that Sir Patrick read,
 The tear blinded his ee.

- 5 . "O wha is this has done this deid,
 This ill deid done to me,
 To send me out this time o' the year,
 To sail upon the sea!

- 6 . "Mak haste, mak haste, my merry men all,
 Our guid ship sails the morn;"
 "O say na sae, my master dear,
 For I fear a deadly storm.

- 7 . "Late late yestreen I saw the new moon,
 Wi the auld moon in her arm,
 And I fear, I fear, my dear master,
 That we will cum to harm."

spak, spoke. *eldern*, elderly. *knicht*, knight. *richt*, right.
a braid letter, either a letter on a broad sheet or a long letter (Child).
wi, with. *lauch*, laugh (*v.* & *n.*). *ee*, eye. *wha*, who. *deid*, deed.
o', of. *Mak*, Make. *morn*, with *the*, to-morrow. *na*, not. *sae*, so.
yestreen, yesternight. *auld*, old. *cum*, come.

バラッド鑑賞二題

—SIR PATRICK SPENCE と THE DAEMON LOVER—

山 中 光 義

はじめに

前号（「文芸と思想」第49号，1985年1月）に続いて，二つの作品のテキスト校訂とテーマによる作品鑑賞を試みた。訳については，既に両作品とも藪下卓郎氏による名訳があるので，ここでは省略した¹⁾。

テキスト校訂について採った方針は，前号における場合と同様である。SIR PATRICK SPENCE については47箇所の手を加えた。一方 THE DAEMON LOVER については2箇所のみであるが，これは Scott の *Minstrelsy of the Scottish Border* の第5版（1812）で初めて世に紹介された新しいもので，既に Scott 自身による整理の手が多少とも加えられているかも知れない。

I テキスト

SIR PATRICK SPENCE (58A)

1. The king sits in Dumferling toun,
Drinking the blude-reid wine:
“O whar will I get guid sailor,
To sail this ship of mine?”

toun, town. *blude-reid*, blood-red. *whar*, where. *guid*, good.

1) 藪下卓郎・山中光義訳『バラッド詩集—イングランド・スコットランド民衆の歌—』音羽書房，昭和53年，参照。